

【暗唱聖句】

「神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」創世記 1:26、27

【日曜日・どのように私たちはここに】

「初めに、神は天地を創造された」創世記 1:1

聖書は天地創造の物語から始まっています。これはこの世界がどのようにしてできたのかという事柄から私たち自身がなぜ存在しているのかということまで、その答えが書かれてあるわけです。それだけでなく、この宇宙には神がおられ、神ご自身がこの世界を創造されたということがはっきりと描かれています。

「知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民／主に養われる羊の群れ」詩篇 100:3

神様はご自分が存在していることを証明されようとはなさいません。聖書を読んだ者たちが、それを信じるか信じないかだけが問われているのです。詩篇 100:3 には、私たちが仰ぎ従う主こそ、私たちを造ってくださった神様であるということ、私たちはその神様のものであり、神様はわたしたちを養って下さるとということが述べられています。

ヘブル 1:2「この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました」

また、この世界は三位一体の神様によって創造されたわけですが、その中でも特に御子イエス様が主導し、万物の相続者としてこの世界を支えて下さっていることが示されています。

「人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです」使徒 17:27

この世界は、人に神様を求めさせるようにできており、私たちが神様を求めさえすれば神様を見出すことができると約束されています。

【月曜日・御自分にかたどって】

創世記 1:27 「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」

私たちは神様にかたどって造られました。ここに神様の人間に対する特別な愛が表されています。人間の親子でも、似ているからこそ愛情が深まり、特別なつながりを感じるのと似ているかもしれません。また私たちが神様と似ているのは姿形だけでなく、内面も似せて造られました。これは私たちを通し神様の栄光が現わされるためでした。

イザヤ 43:7「彼らは皆、わたしの名によって呼ばれる者。わたしの栄光のために創造し、形づくり、完成した者」

人間が動物などの他の被造物と異なるのは、創造される段かいから見られます。「神は言われた。『地は、それぞれの生き物を産み出せ』」（創世記 1:24）とあるように、すべての被造物は神様の言葉によって創造されました。しかし人間は、神様の手によって直接創造されました、

創世記 2:7 「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」

また、人間は男性と女性に造られましたが、その目的は動物のように単に子どもを産んで増えるためではなく、お互いに助け合うために造られました。

「主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」（創世記 2:18）

女性を造る方法は、アダムの場合のように土と塵により造られたのではなく、「アダムから抜き取ったあばら骨で女を造り上げられました」（創世記 2:22）。このことは女性が男性よりも劣ることを意味しているのではなく、逆に男性と

女性が等しい存在であることを現わしています。それと共に、女性は男性と一つとなって愛され、守られる存在であることを示しています。

【火曜日・神と人が共に】

「神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる」創世記 1:28、29

創世記 1:28,29 において、神様は、人間を祝福し、神様の創造された物質的世界にどのように関わって行くかについて教えられました。まず、「産めよ、増えよ、地に満ちよ」と言われます。そして、「地を従わせよ。生き物を支配させ」と命じられました。「従わせよ」「支配せよ」という表現は少し強い響きがありますが、力で支配するのではなく、愛によって支配するのです。それは神様がこの世界を治められるのと同じです。優しく生物を育むのです。命あるものは、そもそも人間のために創造されたのですから、すべての命ある物は人間に応え、喜びを与えることになっていました。また食べ物として、「全地に生える、種を持つ草と種を持つ実」を与えられました。ここから教会の菜食の教えが来ています。

ところで、最初に神様がアダムとエバを祝福して言われたとあるように、人間は神様の祝福の対象であり、その祝福の中で生きて行く存在です。しかし、罪がこの神様との祝福に満ちた関係を壊し、祝福が呪いになってしまうのでした。罪を悔い改めて神様のもとに立ち返るとき、再び祝福の関係を取り戻すことができます。

【水曜日・その木のところで】

「主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」 2:16、17

人間に禁止されていたことは、たった一つでした。後は何をしても自由でした。そのたった一つのこと、決して難しいことを要求されたわけではありませんでした。園の中央にある善悪の知識の木の実を食べてはならないという、ただそれだけでした。神様は人間を、何でも神様に従うロボットのようにではなく、自由意志によって生きることができるようにしてくださったのです。しかし、ただ禁止事項を設けただけでなく、もし破ったならば起こることになる結果についても示されました。それは罪の根源である悪魔の最後と同じように、必ず死ぬということでした。しかし、アダムもエバも死がどういうものなのか理解していませんでした。これと同じように、わたしたちは罪の結果である地獄の火による魂の永遠の死がどういうものなのか知りません。このことは罪を簡単に犯してしまう一因になっているとはいえないでしょうか。

【木曜日・関係を壊すもの】

神様からの要求は難しいことでしょうか。もしサタンさえ誘惑しなれば、彼らは罪を犯さなかったかもしれません。しかし、現実にはサタンは存在し、今もなお誘惑してくるのです。エバはサタンに騙されましたが、アダムはそうではありませんでした。その意味ではアダムの罪はより一層重く、この結果が全人類に波及したのです。しかし、神様はすぐに希望と約束をお語りになられました。

「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く。」創世記 3:15
神様はお前（蛇の背後にいるサタン）と女（エバ・教会・イスラエル）との間に敵意を置かれました。この敵意は、サタンに対する神様の敵意であり、これは女を守るためです。この敵意は、お前の子孫と女の子孫の間にも置かれます。サタンの子孫はサタンに属するもの、女の子孫は神の民。この女の子孫から彼（イエス・キリスト）が生まれ、サタンの頭を砕きます。つまり完全に滅ぼします。しかし、彼もかかとを砕かれます。これは十字架を現わしています。この人類救済計画を、人間が罪を犯した直後に語られたのです。